

北 上 市 一 里 塚

板 橋 源・佐々木 博 康

Report on Investigation of Ichirizuka at kitakami-shi

GEN ITABASHI and HIROYASU SASAKI

I. 調 査 の 経 過

北上市の北部において南北方向に通過している奥州旧街道筋に沿って一里塚が幸にも現存している(第1・2・3・4図参照)。しかも一里塚は、旧街道をはさんで向いあっている2基が36町へだてて2カ所に残存しているということは、いまとなってはまことに稀有といわなければならない。以上のことは、昭和39年3月31日に司東の案内で板橋・鈴木^{はるこ}温子(板橋研究室卒業生)が現地巡検での知見であった。

それで、この保安対策上、次記要項により調査することとなったのである。

記

一 調査の主体

岩手県教育委員会(代表者 工藤巖教育長)

協力者

岩手県北上市教育委員会(代表者 佐々木修教育長)

二 調査の期日

昭和39年10月16日

三 調査地域

1 成田一里塚

北上市飯豊町字成田第28地割73 小原ミツギ所有地(成田西側一里塚)

同上字成田第5地割19 白畑幸作所有地(成田東側一里塚)

2 二子一里塚

北上市飯豊町字村崎^{つかごし}野塚腰稲荷神社地内国有地(二子^{ふたご}西側一里塚)

同上二子町^{こうや}字高屋37 小田島敬作所有地(二子東側一里塚)

四 調査員

岩手大学教授・県文化財専門委員 板 橋 源

県文化財専門委員 司 東 真 雄

補助員

岩手大学文部技官 佐々木 博 康

同 板橋研究室所属学生 熊 谷 久

同 新 沼 武 秀

同 早 川 邦 武

同 小笠原 文 保

北上市教育委員会 沼 山 源 一

北上市民会館 加 藤 俊 夫

五 調査過程の摘要

10月16日 晴 午前10時30分作業開始。まず二子一里塚2基について現状撮影と実測をなし、午後2時30分より成田一里塚2基について同様の順序で調査する。成田一里塚調査では伊藤覚治氏(北上市飯豊町成田小在家)より貴重なる資料と教示をいただいたことを特記し謝意を表する次第である。

Ⅱ. 調 査 の 成 果

調査したのは北上市飯豊町字成田を通過している旧街道(現在の幅員5m50)の東西両側にあつて相対している一里塚2基と、北上市飯豊町字村崎野塚腰稲荷神社の東前面を通過している旧街道(終戦後道路改修工事により幅員は7m50に拡張されている)の東西両側にあつて相対している一里塚2基との計4基である。両者の一里塚の間隔はほぼ36町である。

以下、これら4基の現状と並木・道路幅員について摘記する。

1 成田西側一里塚(第1・5・6・7・8図)

現状の平面底形は隅丸方形に近く東西径14m10、南北径12m50。塚の裾部より塚頂部までの高さは3m、至近道路面より塚頂部までは5m50あるので、塚はほぼ原形の高さを保っているともみなしてよいであろう。

塚頂には径1m30、高さ20mほどの大樹がある。岩手大学農学部永井政次教授によれば、これはケヤキであるという。

2 成田東側一里塚(第1・5・8・9・10図)

塚の東南部の一部と街道に面する西側の部分が大きく欠削している。東西径は残存部で6m、南北径で11m70であるので、欠削されているとはいうもののほぼ原形を推知するに足る状態である。塚の裾部より頂部までの高さは3m20、至近道路面より塚頂までは5m。頂部に補植された桜の木がある。

3 二子西側一里塚(第1・11・12・13・14図)

現状の平面底形は隅丸方形で東西径12m10、南北径11m10。塚の裾部より塚頂までの高さ2m30、至近道路面より頂部までは3m50。4基のうちで最も原形に近いものとみなされる。

塚頂中央部よりやや西寄りに径1m10、高さ15mほどの大樹がある。岩手大学農学部永井政次教授によれば、これはコナラであるという。

4 二子東側一里塚(第1・11・14・15・16図)

現状は隅丸方形の平面形で、東西13m30、南北径12m70、塚の裾部から頂までの高さは2mで、頂部はいくぶん削平されている。塚頂には植樹は存在しない。

5 並木(第17図)

江戸から奥州道中を経て二本松・福島・仙台とすぎ盛岡にいたる旧街道のうち、二子と成田の一里塚の間道筋には、並木は現存していない。しかし昭和の初め頃までは、いくらか残っていたという。このことは伊藤覚治氏(第I章)の芳志により確認された。氏は丹念に日記をつけておられるが、その日記によれば成田東側一里塚のすぐ傍に「二又の松」(「国見の松」とも呼んだという)と称された並木松があった。ところが昭和4年5月7日に伐採されてしまった。それを愛惜した氏は前年12月7日に記念として撮影しておいた写真が第17図である。伐採の際年輪を数えたら300ほどあったという。

この街道筋の並木松の植立ては第III章2項において詳述しておいたように明暦万治の頃であ

ったから、年輪数は年代的にいても符合している。この辺の街道筋の並木は松であったのである。

6 街道幅員

二子一里塚のある街道筋の幅員は今次終戦後改修工事により7 m50に拡張されたため旧状を知ることはできなくなったが、成田一里塚において相対する2基の一里塚にはさまれ比較的旧態を存しているとみられる道路幅員は現尺で18尺であったから、南部領内の奥州街道筋の幅員は3間であったと推定して差支えないと考えられる。

信長が天正3年、4年頃(1576年頃)、尾張国内において東海道筋は幅3間2尺(3間半ともいう。)、脇道は2間2尺、在所道は1間としたというし、秀吉は天正18年(1590)小田原の北条氏を亡ぼしてから小田原会津間の道路幅を3間に修築したらしいという。江戸幕府は大海道は幅6間、小海道は幅3間としたというから南部領内の主幹街道筋の幅員18尺というのは江戸幕府の小海道幅と一致していたのである。

Ⅲ. 考 察

1 奥州道中

近世陸上交通整備は織田信長に始まるとされている。即ち永禄12年(1569)頃から、平定した分国内の関所を廃止し東海東山の宿駅道路橋梁を修補し、天正3年、4年(1576)頃に尾張国内にある東海道筋は幅員3間2尺(或は3間半)、脇道は2間2尺、在所道は1間、高さ3尺と定め、松柳を植えしめたことは、市街地以外において道幅を制定したという点において最初のことであるという。また、天正14年(1586)に36町を1里と定め1里ごとに一里塚を築き、塚上に松・榎を植えたのも信長が最初であるという。従来、1里には6町(東国の北条氏分国)、39町、40町、48町(山陽道)、50町(筑前)、60町(今川氏分国)などまちまちであったからである。しかし信長の36町1里制は、信長の分国内だけにとどまり、全国的に施行されたのではなかったことは、当時としては当然のことである。¹⁾

ところが、これとは別に秀吉が朝鮮役中、山陽道備中河辺と北九州肥前名護屋間に36町1里ごとに路程標を設けたのが一里塚の初見でとする説²⁾もあって、必ずしも一致しないが、一般には徳川氏になってから慶長8年(1603)江戸日本橋を架設し、里程の起点とし、翌同9年東海東山北陸諸道の道路を修治し幅員を5間とし、36町一里ごとに方5間の一里塚を築き、その上に榎または松を植えしめ、その後西南諸道にも一里塚を設けたというのが通説になっている。4代將軍家綱は、万治2年(1659)7月、初めて道中奉行をおき、また五街道を定めた。これは律令制時代の大路制に比敵するものであって、東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中(奥州道中を除いて水戸海道を加え、甲州道中の代りに北陸道を加える説もある)を直轄せしめた。

さて、奥州道中は奥州街道ともいい、日光道中の初めの17駅27里30町余は奥州道中と兼用であるから、正式の奥州道中は宇都宮以北である。即ち宇都宮で日光道中より分岐し白沢・氏家・喜連川・佐久山・太田原・鍋掛・越堀・芦野・白坂・白川までの10駅であって道程10里22町余である。であるから江戸白川間は48町16町余となる。ここまでは道中奉行の直轄であるが、そ

1) 日本学士院編「明治前日本土木史」230頁、昭和31刊。

2) 新城常三「日本歴史大辞典」1の360頁、昭31刊。

れより以北は領主に一任され、踏瀬・矢吹・二本松・福島・桑折・藤田・白石・刈田宮・岩沼・仙台・有壁・一ノ関・水沢・黒沢尻・花巻・盛岡・沼宮内等を経て青森・大浜（油川）より三厩にいたり、蝦夷松前に渡る順序である³⁾。本稿にとりあげている二子と成田の一里塚は、前掲宿駅の黒沢尻と花巻との間に残存しているものである（第1図参照）。

2 路程標一里塚

遠い昔においては行程の目標として、地形とか地物により、かなたの丘、かなたの川、かなたの大杉、かなたの笠松、いつこの追分などを目標にしたであろうし、今日でも通用していることである。

養老の厩牧令に、凡そ諸道には30里（6町1里制）ごとに1駅をおき、若し地勢險阻なるか、水草なき所にてはこれにかかわることなく、便宜にしたがって駅を置くことを得ると規定したのも、路程標識の意味もあつてのことであろう。

奥州平泉の藤原氏が白河の関に北外ヶ浜にいたる20余日の行程に、1町ごとに卒塔婆を立てて行旅の目標にしたことが「吾妻鏡」⁴⁾にみえている。これが明確な示道標の初見とされている。

道程基準が地方によって一定していないということは行旅者にとって不便である。これを一定しようと願うのは当然である。であるから史料としては信憑性がいかほどあるのか疑問な点があるが「信長記」⁵⁾に天文9年（1540）の冬、將軍家足利義晴は40町を1里として里塚の上に松・檜（榎のことだという）を植えたとか、また「箕輪軍記」⁶⁾には永禄4年（1561）箕輪城主長野業政がその子業盛に、死後一里塚と同じにつきこめ塔婆を立てるべからずと遺言したとかみえているのは後世の每一里標のことではなくて「某地より何里何町何間」というような総里程標ではなかったかと解釈されている。⁷⁾

であるから、わが国一里塚に関する定法は、天正年中織田信長が自分の分国中に一里塚を築かせたことにあるとみるべきであろう。

信長の遺業は秀吉に、また家康に継承された。浜村正三郎氏の研究によれば、「初期の一

3) 前掲「明治前日本土木史」231～233頁。

大島延次郎「日本交通史概説」81～82頁、昭28刊。

野田只夫「図説日本庶民生活史」4の61頁、昭和37刊。

4) 「吾妻鏡」文治5年9月17日条。

5) 「信長記」は、太田牛一の「信長公長」を原本にして軍学者小瀬甫菴（1564—1640）が8冊に編述したもので、信長一代の事蹟を儒学的理念をもって叙述してあるので信拠しがたい点のあることはすでに学界周知のところである。

6) 新校群書類従第16巻合戦部662頁所収「上野国群馬郡箕輪軍記」の長野信濃守業政卒去之事附箕輪落城之事条に

「長野業政は箕輪に楯籠る。上杉は二度西平井の城へ帰り、忠義を守りはげみければ、終に本意を不達。剰へ永禄三年古辛下旬より被為責。其印なく或時子息業盛を召遺言被致ける。年頃身命を不顧、敵四方に引請て志を寔にして、退き主君上杉殿二度元城せんと思ひしに、其身今は空布なりぬ。然共此往道理未来を究ても、因縁転き事ぞかし、我死せば一里塚同じにつきこめ、塔婆をも立べからず。あながち敵に降参する事なかれ。敵に打向て心能死討せば我為也。孝養是に過べからず。ああ苦しやと大息つき、はをくひしめ、終に永禄四年林鐘廿二日に御逝去被成ける」とある。

7) 前掲「明治前日本土木史」253～254頁。

里塚を物語る一資料としては、ジョン・サリスの紀行文“The Voyage of captain John Saris to Japan 1613”（慶長18年）を挙げることが出来る。即ち曰く『一里毎に道の両傍に二の小丘あり、その頂には松の木を植え、手を加えて亭の形をなせり。この標は人夫及び馬を賃す者が一里大凡三ペニー以上の賃銭を取らせざらんがために設けられたるものなり』云々と。然るに『鎖国論』の著者ケンブルは之を評して『道路は好き規則にして、二百年前、英吉利の甲必丹サリスと云へる者の記に、道路は一里づつ木を植ゑたる丘あり、其の里数を表す的切の設也、此の制は欧羅巴は今に無き制也』と、我国の一里塚が歐洲になき立派なる制度であると賞して居る。」⁸⁾とみえているので、ここに引用しておく。

一里塚の間隔は正確に1里ずつになっているとは限らない。多少の伸縮があるのは神社仏閣の前通り、特殊部落などは竿除地として除外した場合があるからだという。

一里塚の築造は、慶長9年（1604）将軍秀忠が家康の命により、江戸日本橋を起点として東海東山北陸の3道に道の両側に一里毎ごとに敷幅方5間の塚を築き、その上に榎（時には松）を植えしめたというのが通説になっている。なお、本章次項参照されたい。

一里塚の名称は、地方によっては一里檀（岩代）、一里松（篠山・鳥取・徳島）、一里塚松（佐賀）、一本木（庄内）、印木（秋田）一里林（高知）、そのほか一里山（広島）、一本松（徳島）、二本榎（たとえば江戸の芝）ともいい、熊本より八代の間では二里塚、三里塚、四里塚などと称した。秋田の二里、千葉の三里塚、庄内の十里塚などの地名は、一里塚と同様標識となったものであろう。⁹⁾

本県においても、主幹奥州街道筋ではすべて一里塚という名称であるが、脇街道である宮古街道（盛岡城下より東海岸宮古にいたる）では七里塚といった。6町1里の7里ごとの塚であったからである¹⁰⁾。以上のほかに、七里塚と称する名称は県内の気仙・東磐井・江刺（以上旧仙台台領）・和賀・上閉伊（以上旧南部領）の5郡にもあり、いづれも脇街道である。¹¹⁾

3 二子・成田一里塚築造の年代

「徳川実記」は「家忠日記」・「当代記」・「慶長年録」・「寛永系図」等を参照して慶長9年（1604）2月4日条に

「右大將殿の命として諸国街道毎に塚（世に一里塚といふ）を築かしめられ、街道の左右に松を植しめられる。（中略）東山道は山本新五衛門重成」¹²⁾

と記して、さらに同月5月条の末尾に

「是月、先に右大將殿より命ぜられたる諸国塚ごとごとく成功す」¹³⁾

と記してある。陸奥国は東山道に所属していた。これによれば東山道の一里塚は慶長9年2月

8) 浜村正三郎「一里塚と並木」経済史研究第11巻第5号59頁、昭和9年5月刊。

9) 前掲「明治前日本土木史」254～255頁。

10) 「宮古由来記」（南部叢書第1冊所収）に「寛永十八年從森岡被仰付候に付而は、三閉伊の道法相改七里塚築立申候様に被仰付候、依之小元助兵・船越新左衛門兩人、三閉伊道法相改、四拾式丁を宍里と定め、七里詰の塚を築立申候、宮古御水主丁の橋の左右に榎木寛永二十年に植」とある（324頁）。因に同書は文化年間に書写されたものである。

11) 「県史蹟名勝天然記念物調査報告」第2号、大正11年度調査。

江刺郡内での七里塚という呼称について、真偽のほどは不明であるが「伊達政宗、六の数を忌嫌し七町を小道一里として其の塚と塚との間は四十二町を以て一里と定めた」という伝承がある（同上報告書）。

12) 新訂増補国史大系第38巻104頁。

13) 同上111頁。

に築造を命ぜられ同年5月中に完成したことになるが、「当代記」¹⁴⁾では慶長9年の8月に命じたことになっていて、両書が一致しない。それで「大日本史料」第12編之2は月日を決定することを避け、単に慶長「9年トシテ月ヲ書セザルニ従フ」としてある。そして、これが通説となっている。

さて、それならば南部領のうちの南半部4郡（和賀郡鬼柳から稗貫・紫波・岩手の4郡）の中央筋にあたる奥州街道の一里塚築造はいつなのか。

「文化元甲子年（1804）臘月中五日」の自序ある南部藩の阿部知義の著「郷村古実見聞記」や「南部史要」には、他の地方と同様慶長9年に南部領奥州街道の一里塚が築造されるような記事がみえているが文意は必ずしも明確でない。¹⁵⁾

しかし、慶長9年8月に南部領のうち二子と成田の一里塚のある奥州街道筋の部分がつけ替

14) 史籍雑纂第2冊84頁所収に

「慶長九年八月条

当月中、関東従右大将秀忠公、諸国道路可作之由使相上、広さ五間也、一里塚五間四方也、関東奥州迄右之通ナリ」

とある。

15) 「諸国壱里塚始之事

慶長九甲辰年、依 台命山本新五左衛門・榎本清右衛門下向、東奥の駅路に壱里塚を為築、此年五畿七道ともに司職之旨蒙 台命勤之」（南部叢書第4冊71頁）

これが「郷村古実見聞記」の文であるが、「東奥」の一里塚は「諸国」と同じく慶長九年にできたと解釈して差支えない文章だとすれば問題がないことになるが、慶長九年から200年もあとの記載であるということ、つぎは標題に「諸国壱里塚始之事」とあって「南部藩領内の一里塚」とも「奥州街道の一里塚」とも明記していないこと、以上の二点に注意するならば、「東奥」の一里塚築造年代が明確でないが故に、幕府が一里塚築造を命じた慶長9年という明白な年代に関連づけて「東奥」のことを仮拙付説し、暗々裡のうちに「東奥」も諸国なみに同し年に築造したごとくに作為した記事ではないかという疑念もわいてくるような、そんな書きぶりの記事ともとれるのである。

「南部史要」（菊池悟郎著、明治44年刊）の「慶長九年二月幕府の命により領内道路の里程を定め一里塚を築く、一里は三十六丁とし塚の上には榎を植う」（85頁）という記事も、一里塚築造着手が慶長9年で完成が何時なのか、着手と完成が9年なのか、さらにまた「領内道路」というのは奥州街道の本筋なのか、それとも脇道をも含めた領内全域の道路筋のことなのか、文意は明確でない。「南部史要」は参考文献として「篤焉家訓」をもあげているのに、一里塚に関する同書の記事を引用していないのは不審にたえない。

えになったという有力な史料があるし¹⁶⁾、また南部藩の故事に暁通していた有名な博識者市原篤焉¹⁷⁾の書き残した「篤焉家訓」九之巻にも

「慶長九甲辰二月四日、江戸ヨリ諸国道中筋^五一里塚被仰付候、公儀右為御奉行大久保石見守御廻り同十五庚戌年五月日出来」¹⁸⁾

とみえているので、慶長15年(1610)5月頃に完成したことは信ずべきではなからうか。

しかるに奥州街道筋の見前・徳田の一里塚築造をはかるか57年ほど後の明暦3年(1657)、石鳥谷の一里塚を明暦年間の築造、二子一里塚を万治年間(1658—1660)の築造などとする説¹⁹⁾は単なる推量にすぎない。明暦・万治よりも以前にすでに一里塚が奥州街道はもとよりの

16) 北上市黒沢尻町里分新富町小沢せつ家の文書に

「黒沢尻本町始まり之事

慶長九甲辰八月御町に御割被成候、爰元は大分の大かや立にて御座候、右之大かや刈かへし御町に割申候由、村々より見ぬき町居為致申由に御座候。年数改見申候に、慶長九年より宝永三年迄老百年に罷成」

とある。ここにいう黒沢尻町は今の北上市の中樞市街部のことであって奥州街道筋の宿駅である。ここから1里北が二子一里塚であり、2里北が成田一里塚である。黒沢尻宿駅が慶長9年に萱野を切開いて新設されたということは、西方山手寄りにあった中世末までの道路筋をこのとき北上川西岸筋寄りに切替えられたことの証拠である。

因に、小沢家は家伝家系図によれば、家祖小沢兵部は江刺郡鶴脛に住んでいたが葛西氏滅亡後南部氏に仕えるようになり和賀郡北上川岸に移った。南部氏が和賀氏を岩崎城に攻めた際、南部氏に従って出陣、戦死。兵部の子五郎三郎は肝煎役となった。慶長九年南部氏が黒沢尻町を新設するにあたり検断役となった。五郎三郎の子も五郎三郎で、やはり検断役をつとめ、以後代々踏襲する例となった。2代目五郎三郎の次は鬼柳村の及川助右衛門家の助七を養子にむかえた。助七は平左衛門と称し記録をつけはじめた。平左衛門という称名は3代続いたらしいという。2代目平左衛門も記録を書きついだ。初代平左衛門から2代平左衛門までの記録は元禄6年から延享3年まで54年にわたっている。記録の約3分の1を、子孫にあたる故小沢恒一氏(早稲田大学・国士館大学教授歴任)が生前「黒沢尻見聞古記」として出版された(昭和17年2月20日刊、非売品)。ここに引用した古文書の信憑性の一助にと考えて、付言した次第である。

17) 篤焉は盛岡の人で、名は忠寄、通称謙助、篤焉はその号である。弘化3年(1846)1月3日歿。盛岡市法泉寺に葬られた。

18) 元伯爵南部家旧蔵、盛岡市下小路市立公民館現蔵、筆書本。

19) 大正11年度調査の成果を収録した「岩手県史蹟名勝天然紀念物調査報告」第2号所収「県下に於ける一里塚」には「紫波郡内国道筋見前、徳田村地内のものは徳川幕府東海東山道の諸街道を修理し一里塚を築かしたり即ち江戸日本橋を基とし七道に亘りて三十六町毎に之を置き塚上に榎を植えて目標となさしめたるものにして明暦三年の築造に係るよし云ひ伝う」「和賀郡二子村旧国道筋のもの(註、二子一里塚のこと。)は万治年間に、又飯豊村のもの(註、成田一里塚のこと。成田は旧飯豊村であった)は徳川將軍家光道路開整の際里程標として設けられたるものなりと伝う」とある。また大正12年調査の成果を収録した同上第3号所収「石鳥谷の一里塚」に「この塚は慶長十一二年頃築かれたといわれているが、南部領内は明暦年代に一里塚を完成したようであるから、これもその頃のものであろう」とあって、土地に残っていた妥当な慶長11・12年頃という所伝を誤った先入観念に捕われて否定し、明暦年代に固執している。

こと脇街道筋にさえ存在していた明証が南部藩の正確な「藩日記」にあるからである。²⁰⁾

それなのに、明暦万治の頃に南部領内の奥州街道筋の一里塚が築造されたという誤った説が生れたのであろうか。それは並木植立の年代を一里塚築造の年代と誤解したのに相違ない。これから、その理由について説明する。

「郷村古実見聞記」によれば

「御領内新道造並木植立候事

山城守重直公御代、明暦四年（1658）御領内之馳^(マ)曲り、又は山道も新道造て日光道之如く、左右に松を植悉く行程を可吟味と有。花巻筋は御城代、盛岡・郡山・雫石道は赤前治右衛門・上野左近兵衛、奥筋は工藤右馬之助・町野清左エ門等承、新道を造り、或は本道の曲を直街道幅左右之除地共に此節に相極る。」（南部叢書第4冊72頁）

とあって、御領内新道に並木を植立てたのが明暦4年頃からであったのである。このことをさらに他の史料によって立証しよう。二子村の肝煎であった富岡理翁（川端姓をも称していた。名を理平治ともいった）が天保2年（1831）に成稿した「二子物語」（盛岡市下小路公民館に筆写本所蔵）に

「南部街道並松植立之事

万治二^{己亥}（1659）年也、天保辛卯年迄に百七拾三年に成る。

海道掃除場所十文字より南四百四拾九間五尺、是は御蔵十三組と御給所迄外に御新田四拾間也、場所は五輪田の背也、

天保二辛卯 三月

富岡理翁笑草綴之」

とあることによって、明暦・万治は奥州街道筋の並木植立ての年代であったことが判明する。しばしば引用した「篤焉家訓」巻之巻には、領内街道に並木を植えるにいたった経過を次のようにのべている。明暦3年正月、江戸に大火があったので諸国大名に帰郷を許可した。南部公も3月に江戸を出発し帰途につくのであるが、領内の道路の悪いのに気付き「其脇＝並木松植立日光街道の様＝仕」ることを命じたというのである。それから、明暦4年（万治元年）、万治2年と並木植立を実施することになったのである。それなのに、明暦万治を一里塚築造年代

20) 南部家の「藩日誌」（盛岡市下小路市立公民館所蔵筆写本）によれば、明暦・万治の数年以前に於たる承応2年（1653）4月条に

「朔日、滴石通・栗谷川・寺田迄、一里塚破損見調、又道中脇柳松候哉、見廻候様にと、煙山七郎兵衛、今日申付」

「四日、盛岡より野辺地迄（註、奥州街道なり）一里塚、道筋柳、為改四戸清兵衛、福岡より八戸中へ堀切半五郎、盛岡・郡山・花巻中（註、奥州街道なり）田中久太夫何れも今日被遣之」

とある。これによれば、少くとも脇道である滴石通・栗谷川・寺田までは承応の頃すでに一里塚があり、しかも破損が憂慮されるぐらいの歳月を経過していたことが知られるのである。脇道の一里塚がそれほどの歳月を経ているのであるから、本街道筋の一里塚ととも同様の星霜を経過していたはずである。本文に掲げておいた「篤焉家訓」の一里塚慶長15年5月完成から起算すれば承応2年まで40余年たっている。この年数は一里塚破損を「見調」しなければならぬ年数にかのうのである。

遠野市の松田友樹氏が同市下組町の旧家中館都興氏の古文書を調査した際、「万覚書」のなかに「承応元年（1652）七月十九日、一里塚築始、塚の地形高サ二間半、上指シ渡シ二間、塚ノ上ニエの木杉、ひの木植申様ニト御付候」とあったという。脇道遠野街道にさえ一里塚が万治以前にあった傍証とすることができよう。

「宮古由来記」によれば、明暦・万治より10数年以前の寛永18年に東海岸の宮古方面にいたる脇街道筋に七里塚（6丁1里）を築造したことが、本稿註10に掲げておいたようにみえているのである。

と誤解したところから如上の臆説が起ることとなったものに相違ない。

二子・成田の並木松は万治2年の植立であることは前掲富岡理翁の「二子物語」によつて信ずべきであろう。

4 文化遺産としての二子・成田一里塚

国の特別史跡および史跡の指定基準では、貝塚・遺物包含地・住居跡（竪穴住居跡・敷石住居跡・洞穴住居跡等）・古墳・窯跡・城跡・社寺の跡・経塚などのほかに一里塚や並木街道など「産業交通土木に関する遺物」も含まれてある²¹⁾。一里塚は幕府および各領主によって保護されたのは当時としては当然であった。しかし1780年代（天明頃）には原形を失うもの大半に及んだという²²⁾。ことにも維新以降は閑却されるようになり、例えば明治8年、本県においては中里村（現一ノ関市）から中尊寺村（現平泉町）までの一里塚4つが「此節無用之物に御座候得ば」これを取り崩し、その土を道路修繕にあてたいと請願した者に、当時の水沢県が許可を与えている²³⁾。このようにして、維新以降一里塚は急速に崩壊消滅の一途を辿るのであるが、それでも大正11年頃までは県下の本街道・脇街道筋には次表のごとく、かなり残存していたのである。

郡	名	原形を存するもの	破壊せるもの	計
岩手郡	手郡	17	11	28
紫波郡	波郡	9	12	21
稗貫郡	貫郡	4	9	13
和賀郡	賀郡	3	1	4
胆沢郡	沢郡	5	3	8
江刺郡	刺郡	6	5	11
西磐井郡	磐井郡	2	—	2
東磐井郡	磐井郡	6	5	11
気仙郡	仙郡	22	8	30
上閉伊郡	閉伊郡	19	15	34
下閉伊郡	閉伊郡	—	—	—
九戸郡	戸郡	2	2	4
二戸郡	戸郡	11	7	18
盛岡市	岡市	—	—	—
計		106	78	184

二子・成田の一里塚がちょうど36町へだてて一対が向いあったまま現存しているのは、明治12年に国道が切替えとなり、黒沢尻から国鉄東北本線の西寄りに変わったため、黒沢尻・花巻間の奥州街道筋が裏街道に転落したことが幸したのであった。

それからというものは、これら2カ所の一里塚はともに世人に忘却され、例えば大正8年に岩手県教育会和賀部会が初めて編纂した「和賀郡誌」にも記載されず、また皇紀2600年記念事業として本県下の小学校が一斉に郷土教育資料の編纂を企画した際にも当時の二子小学校（二

21) 昭和26年5月10日文化財保護委員会告示第2号「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」第6項。

22) 新城常三「日本歴史大辞典」1の360頁、昭和31刊。

23) 田中喜多美「岩手県並木史」34～35頁、昭和22刊。

子一里塚のうち東側一基は当時二子村にあった)のものにも、飯豊小学校(成田一里塚2つと二子一里塚の西側1基とは当時飯豊村にあった)のものにも記載されなかった。わずかに大正2年に刊行された鈴木隆太郎氏の「二子村誌」に「高屋部落には稲荷神社あり。地は飯豊村の中にあり。九月七日の祭日なり。此附近、皆昔時二子村中のみなりしなり。社のほとりに一里塚のあり」(48頁)と、神社に付随してのべられている程度であった。それにしても、大正2年「二子村誌」はその後に刊行された「和賀郡誌」、「二子村郷土教育資料」、「飯豊村郷土教育資料」(以上2書は県立図書館所蔵)編纂のとき閲覧されたであろうと思われるのに意識的に除外無視されたのであったとするならば、心外というほかはないのである。

奥州街道に沿ってあった石鳥谷一里塚(稗貫郡好地村大字好地第六地割五番官有原野)は文政の頃が和田氏武の編述した「二郡見聞私記」に「往古の一里塚あり、此街道を弾正下りとして、九戸退治(註、天正19年九戸政実の乱)の時、浅野弾正殿下向のときの街道、此街道筋のよし」²⁴⁾と記録され、大正12年度調査の際は「好地村役場から国道に南三町許の処にあり、塚は西側に一個だけ残ってあってその上に榎が二本植っているが実測は(甲)地上三尺の処で廻り二丈一尺三寸、(乙)同上八尺三寸五分ある」²⁵⁾と記されているが、榎は太平洋戦争の頃伐られ²⁶⁾、塚は昭和23年から24年頃に潰滅し現在では東西両側の塚跡には民家が建っている²⁷⁾。ただし大正12年の県調査報告には見えていないが、前記好地一里塚より南方1里の江曾(現在国道4号線筋)に、道の東側一里塚が「高さ約3m」の土盛りとして残っている(柳原祐輝氏所有宅地)²⁸⁾。

盛岡城下から南方1里の川久保の一里塚と、同じく南方2里の見前の一里塚もともに奥州街道のもので、大正11年度の県調査の際は「川久保の分は民家が接近しているために、二方が掘り取られて国道に面する一方が僅かに原形を保つ有様であるが、道路の東側の物が半分以上は掘り去られて実に哀れな残骸を保っているばかり」²⁹⁾であったが、今ではほとんど潰滅してしまった。「見前町の方は東側は全く掘り去られて痕跡を止めるに過ぎないが、同所西側の分は殆ど完全で築塚当時植えられたと思う榎が実に見事に繁っていた(中略)。周囲が約一丈二尺あって頭上に巨大な四本の枝が出て天に広がっている。但し南方の宅地主がこの塚の根本を掘って小屋を建て、その屋内から塚の内部に穴室を掘っている」³⁰⁾が、それでもとにかく残っていたのであったが、今ではまったく潰滅してしまった。花巻市宮野目の一里塚は、花巻豊沢橋寄りの「塚の根」(「森の根」ともいう)より36町1里の地点にあったが、惜しいことに一方は耕地整理のとき破壊され、一方も崩され家が建って消滅した³¹⁾。「塚の根」とか「森の根」とかというのは崩壊した一里塚の跡をいうのである。盛岡以北のことになるが、二戸郡福岡町付近の一里塚は一戸の小枝、福岡の五日町、金田一このの小野にあった一里塚は「川端に岩谷坂を下りて左羽内坂を上って通ったが、この両側に一里塚とて榎が植えてあった。今はない。足沢

24) 南部叢書第9冊339頁。

25) 「岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告」第3号所収「石鳥谷の一里塚」。

26) 「岩手県史」第5巻1192頁。

「奥羽史談」第2巻第2号、昭和26年5月刊。

27) 昭和39年11月11日付石鳥谷町教育委員会報告。

28) 同上。

29) 「岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告」第2号所収「見前一里塚」。

30) 同上。

31) 熊谷章一「花巻のあゆみ」22頁、昭和37刊。

の家の処を塚の根と言った」³²⁾ところにあった。これは昭和14年当時91歳であった下斗米たよ女(田中館秀三教授母堂、田中館愛橋博士の義理の叔母)の直話である。

このように破壊され消滅していく一里塚の運命を思うにつけても、今回調査した一里塚は奥州南部街道を挟んで向いあった一対が36町へだてて共に残存しているということは、貴重な史跡といわざるをえない。

図版説明

第2図 「元禄10年(1697)南部領古絵図」の二子・成田一里塚

盛岡市下小路市立公民館所蔵の古絵図で、図の中央南北に北上川がみえている。北上川西岸「二子村」の文字の西方の黒点2個が二子一里塚、「成田村」の文字の西北方の黒点2個は成田一里塚である。

第3図 寛延4年(1751)清水秋全の「増補行程記」の二子一里塚

向って左端に「一里塚」の文字がみえている。盛岡市下小路公民館所蔵。秋全は明和3年(1766)3月10日、61才で歿。盛岡市東頭寺に葬る。

第4図 同前「増補行程記」の成田一里塚

中央折目のすぐ左に「一里塚」の文字がみえている。

第7図 成田西側一里塚写真

成田東側一里塚の頂部より、旧街道をへだてて西方に望む。

第8図 成田一里塚2基の写真

手前は西側一里塚、遠景の塚は東側一里塚である。両一里塚の間に白くみえているのが旧街道。

第10図 成田東側一里塚写真

西側一里塚の頂部より、旧街道をへだてて東方に望む。

第13図 二子西側一里塚写真

北より南方に望む。向って左に旧街道の一部が白くみえている。

第14図 二子一里塚2基の写真

西北より東南方に望んだもので、旧街道をはさんで向って左(一部分が新築家屋のかけになっている)が東側一里塚、右が西側一里塚である。

第16図 二子東側一里塚写真

旧街道上より東方に望む。

第17図 成田一里塚近傍に残ってた並木松

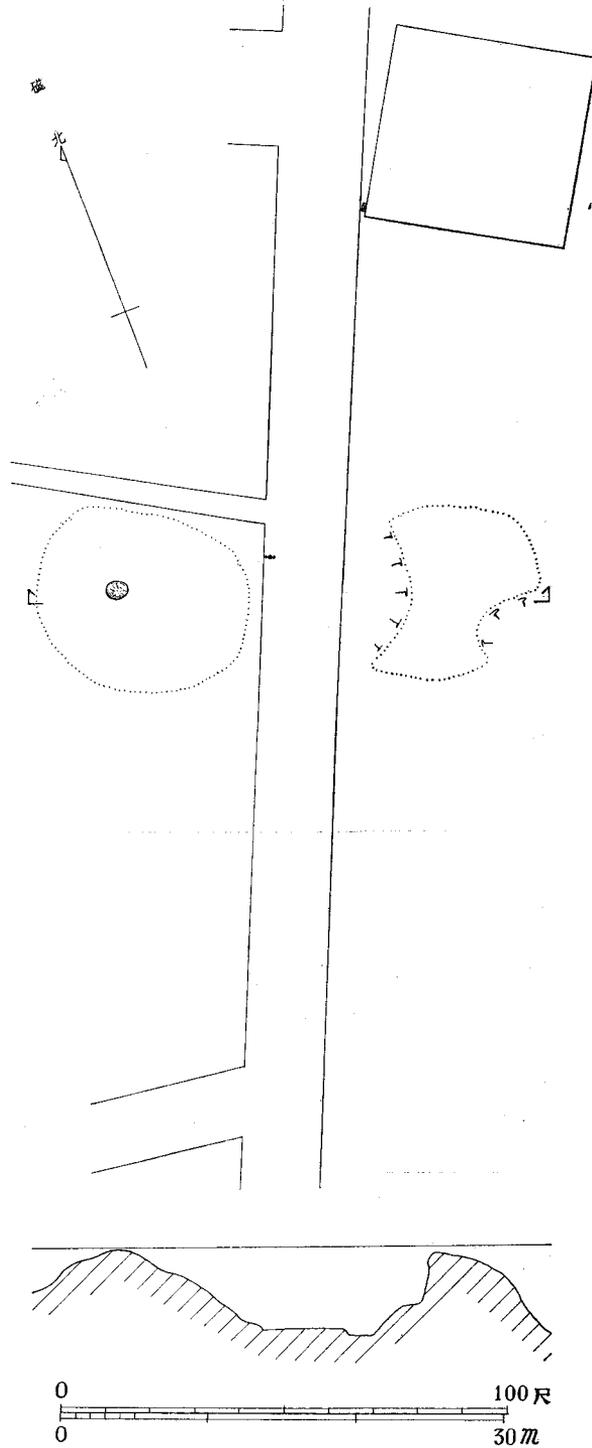
昭和3年12月7日、伊藤覚治氏が旧街道北方より東側一里塚と「二又の松」(並木松)を撮影したものである。

32) 山口弥一郎「二戸聞書」151頁、昭和18刊。

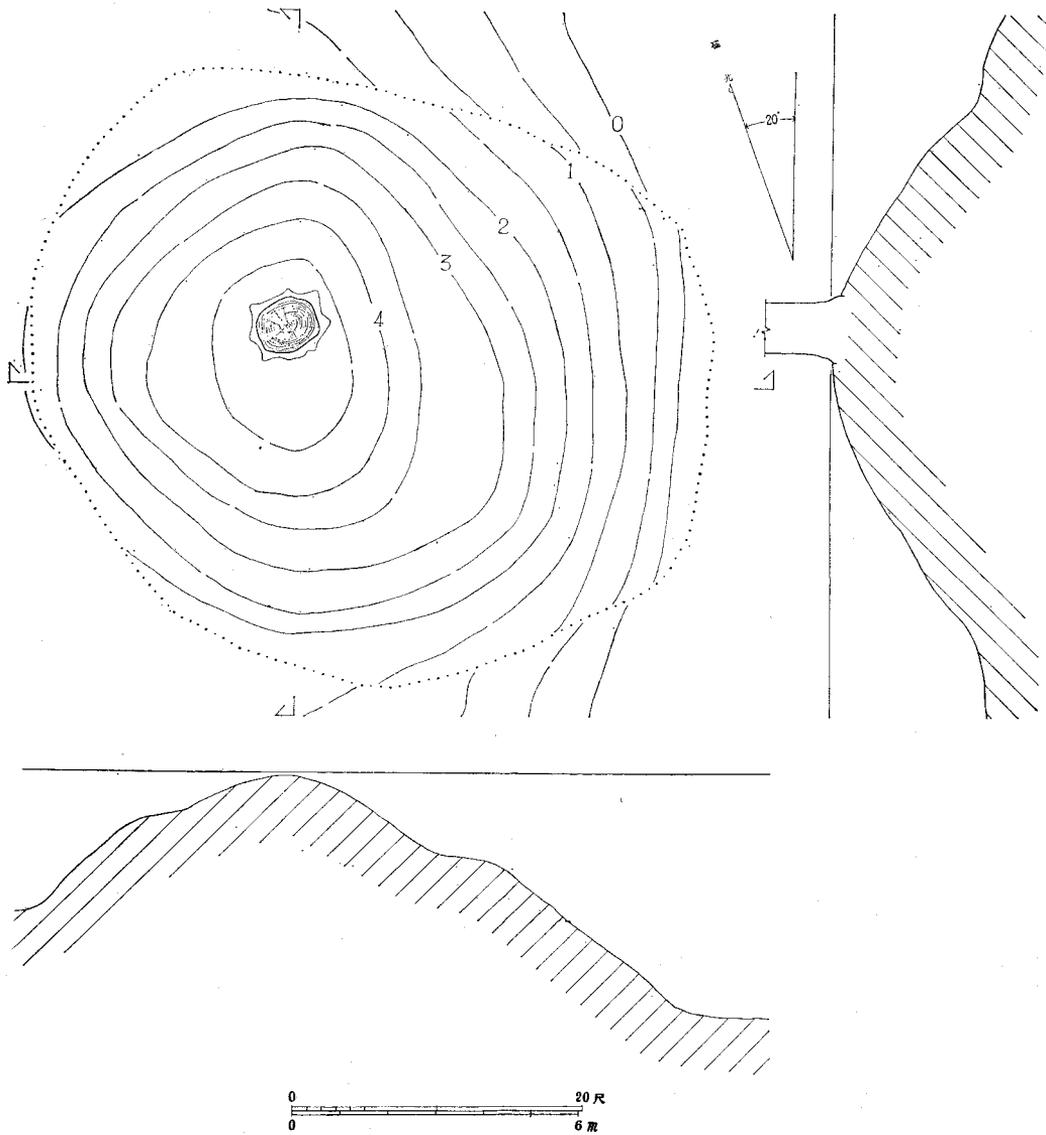
第1図 二子・成田
一里塚位置図
花巻・黒沢尻5万分
地形図に拠る。
黒円圏の中心がそれ
ぞれの位置を示す。
北は成田、南は二子
の一里塚である。



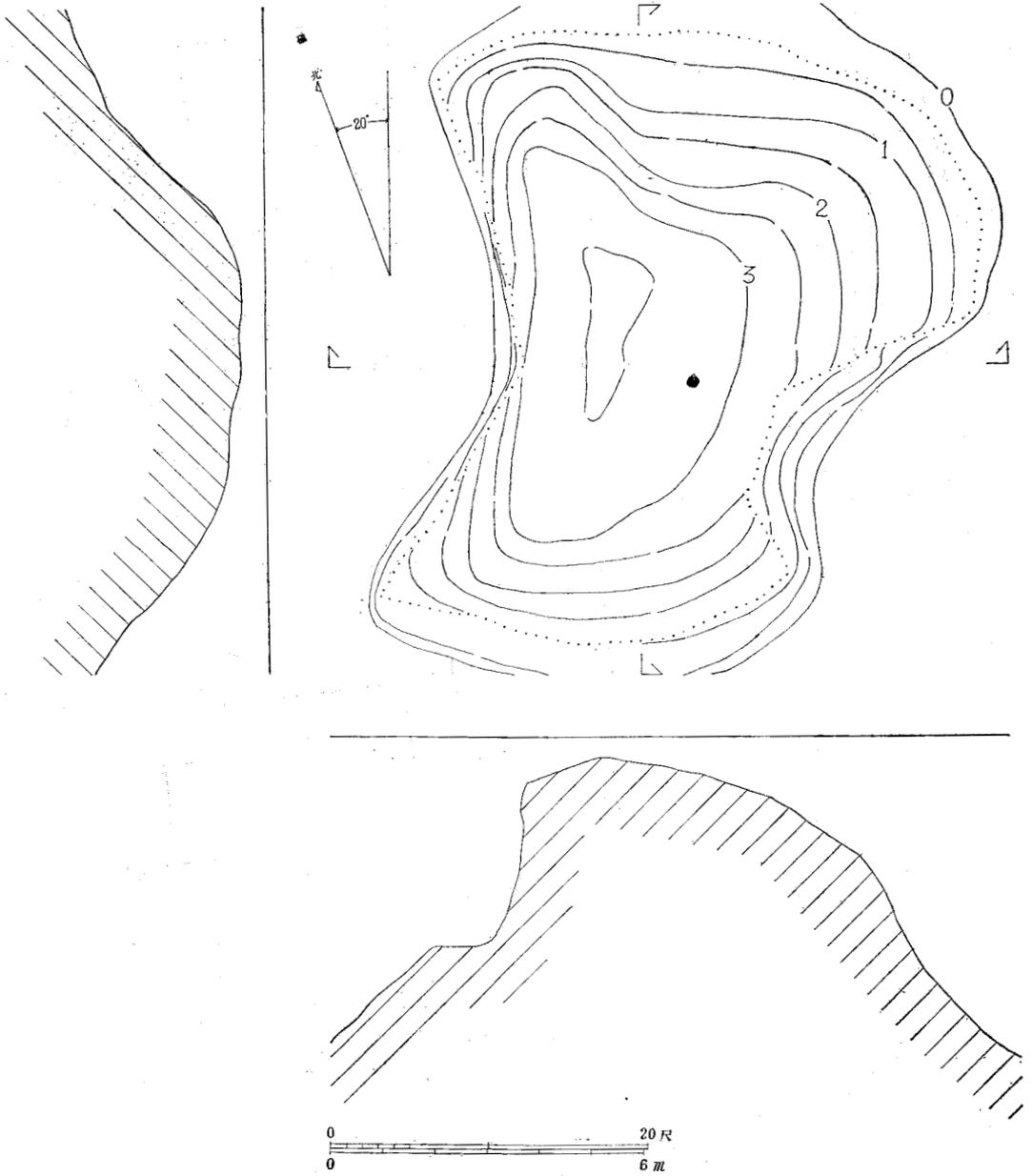
第5図 成田西側一里塚平面実測図



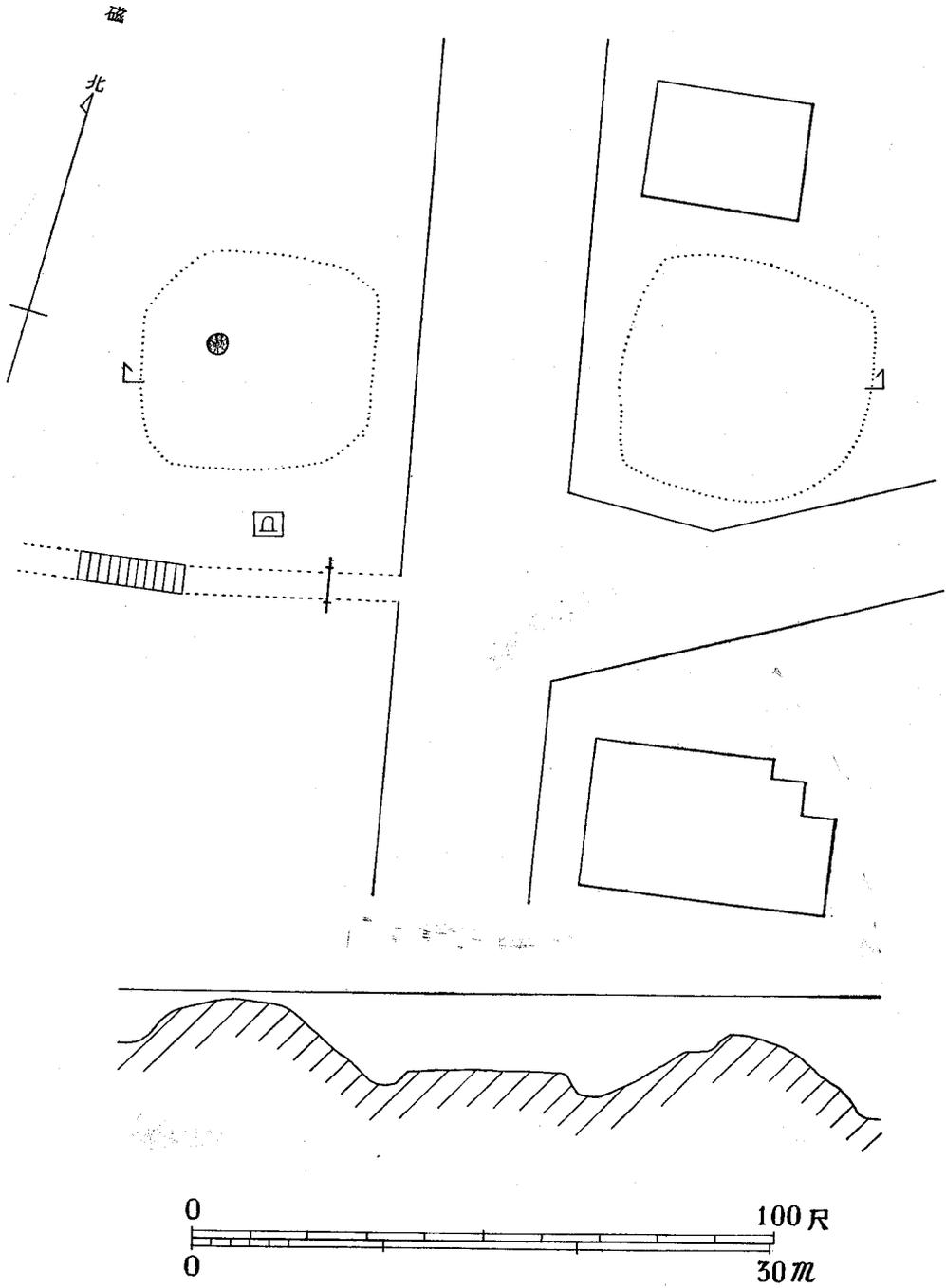
第6図 成田西側一里塚実測図



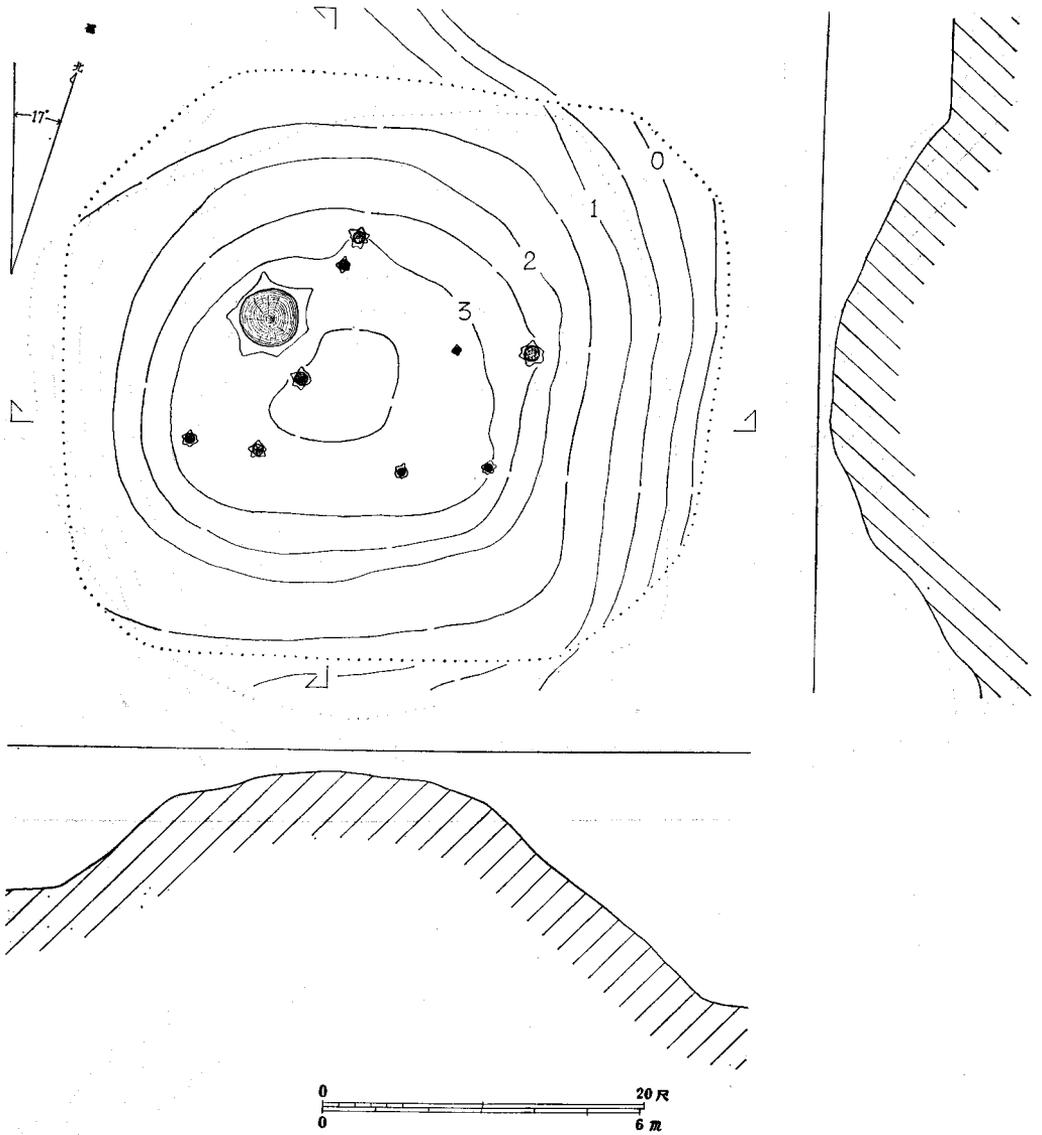
第9図 成田東側一里塚実測図



第11図 二子一里塚平面実測図



第12图 二子西側一里塚実測図



第15図 二子東側一里塚実測図

